

日英放送通訳 歴史と現状

石黒弓美子

(会議・放送同時通訳者)

日英放送通訳の歴史

現在、日本で日本語と英語による多重ニュース放送を実施しているのは NHK だけである。その目的は、国内外の外国人に向けて日本についての適切な情報を発信することである。それによって日本についての理解を深めてもらい、日本に友好的な人たちを増やすことが期待されている。このような海外への情報発信の始まりは、日本では 1925 年にスタートした国際放送が原点であると言ってよいだろう。当初の国際放送はラジオ放送で、在外邦人を対象に情報と娯楽番組を提供した。その後、国内外の情勢変化を受けて 1936 年には英語による国際放送が開始されている。1941 年には英国の BBC が The Empire Service と称して国際放送を開始し、オランダ(インドネシア宗主国)もフランス(ベトナムの宗主国)も強力な国際放送をスタートさせていた時代であった。アメリカも 1942 年には VOA、Voice of America を設立している。

その後、日本は敗戦を経験する。連合国による占領下では、1945 年 9 月から GHQ によって国際放送が禁止され日本からの情報発信は大きく制約されたが、1950 年には放送法が設立し、1952 年改めてラジオジャパンによる国際放送が再開する。翌年の 1953 年には、放送法の改正と国際放送基準の成立を見て、世界のどこでも英語と日本語による日本からのニュースの発信が聴取可能となった(NHK 国際放送局 2015)。

それ以後、対外的な情報発信活動はテレビの発明とともに映像による情報発信へと進化する。多重放送技術の研究は多言語が使われていた欧州で先行していたが、日本でも 1960 年代初頭からテレビ多重放送技術の研究が始まる。1964 年の東京オリンピック開催も技術的発展の推進力となり、オリンピックの際には、現在に続く日本語と英語による多重放送の技術的実験が行われた。そして、1970 年 3 月から 9 月まで大阪で開催された万国博覧会を機に、日英多重ニュースの実験放送が行われ、1978 年には実用を目指した試験放送が開始された(沼口 2011)。

この時代、ニュース原稿の英語化にあたったのは NHK 国際局ラジオジャパンのスタッフであったが、1985 年、多重ニュースの本格的スタートに伴って外部から同時通訳者、翻訳者、そして英語母語話者のリーダーたちが動員されるようになった(川野辺 2008)。当時は放送通訳というジャンルはまだ確立されておらず、会議通訳者たちが放送現場に動員されたのである。

ニュースの多重放送は一時民放でも行われていた。日本テレビでは、1987 年から 1992 年まで、5 つのニュース番組が英語化されていた。フジテレビでは、1987 年から 1993 年の間、テレビ東京でも 1988 年から 1989 年まで、それぞれ 1 番組が英語ニュースとしても放送されていた(柴原 2003)。また、実際に通訳として番組に関わっていた貝塚峰子氏によると、TBS では 1987 年から 2009 年ま

で、1つのニュース番組が英語でも放送されていた。しかし、現在では、新聞のテレビ欄を見る限り、NHK 以外ではニュースの多重化は実施されていない。

NHK で多重ニュース放送を本格化させた頃から生の同時通訳付きで放送しなければならない出来事が重なって起きてくる。というよりは、ニュースが多重化され、同時通訳者が配置されていたからこそ生の同時通訳付き放送が可能であったというべきかもしれない。その一つが1989年1月の「大喪の礼」である。昭和天皇の崩御により執り行われた葬儀の様子がテレビで生放送され、同時通訳者による通訳がつけられた。同じ年の6月には天安門事件が発生した。民主化を求めて立ち上がり戦車の前に立ちふさがった学生の姿とともに伝えられたレポートや解説が、同時通訳者の英語でも流された。更には1990年1月の新天皇「即位の礼」、そして1993年の皇太子殿下・同妃殿下の「結婚の儀」も生放送され、これにも同時通訳者が動員された。

日英放送同通を担える人員の養成が急務であると痛感される出来事がそれから続いた。1995年になると、世界を震撼とさせる事件が連続で発生したのである。その第一は、この年の1月に起こった阪神淡路大震災である。発災直後からNHKでは長時間にわたって同時通訳付きで関連ニュースを放送した。その後も連日、被災者の状況や支援の必要性、ボランティア活動などについて、多重ニュース放送での情報発信が続いた。それに追い打ちをかけるかのように起こったのが3月のオウム真理教地下鉄サリン事件である。この時も、連日、生の同時通訳を必要とする報道が続いた。

更に2001年9月11日、いわゆるアメリカ同時多発テロ事件、911事件の発生である。当時の多重ニュース放送は、19時からの30分と、22時からの1時間の放送であったが、ちょうど筆者も多重英語ニュースのスタジオに入っていた。22時の放送開始直前に、「ニューヨーク貿易センタービルに航空機が衝突した」という一報が入った。しかし、その時はまだ事件性は認識されてはおらず、番組冒頭は台風のニュースであった。ところが、「今入ったニュース」と断って担当アナウンサーがこの航空機衝突の第一報を伝え、現地国連ビルにいた記者とのやり取りを始めた直後、画面にも映し出されていた炎上する貿易センタービルの隣の2棟目に、2機目の航空機が突っ込んだのである。この瞬間にNHKでは、これは事故ではなく、明らかに何か重大な事件が起こっていると認識され、ここからは台風の他、その日準備されていたニュース項目はすべて没となって、緊急報道体制に切り替わった。そして、これ以後は同時通訳付きで延々と25時まで生放送でこの事件の報道が続いたのである(NHK 国際放送局 2015)。

一方、この事件の報道では、発生直後からBS放送のスタジオでもアメリカのニュースが日本語への同時通訳付きで放送開始となり、NHKの担当者にとっては同時通訳者の調達課題となった。地上波のスタジオでは通常配置の2人の通訳者の他に、更に2人の通訳者がまもなく到着したが、途中、4人の内の1人はBSのスタジオへと引き抜かれていってしまった。また、筆者を含めた数人の同時通訳者は、多重の英語ニュースが終わった後には、BS放送のスタジオで夜中の2時以降まで英日同時通訳を担当するよう依頼され、更にはその後も近くのホテルに留め置かれて、朝7時にはまたスタジオに呼び戻されたのである。

この出来事の後、NHK グローバルメディアサービスの前身であるNHK 情報ネットワーク・バイリンガルセンターで、ようやく日英放送同時通訳者養成コースが実現した。2003年のことであった。こ

のコースは単発のコースで、バイリンガルセンターの会議通訳コースを受講していた人の中から英語力のしっかりした数人を選んでの実施であった。

それ以後も、日英放送同時通訳者が数多く確保されなければならない災害や出来事が頻発している。2011年3月11日に発生した311東日本大震災の折には、1000年に一度といわれる地震、そして大規模な津波、更には東京電力福島第一原子力発電所で炉心熔融を伴う前代未聞の原発事故が発生したこともあり、NHKが英語で発信する情報は世界中で渴望された。NHKでは、地上波とNHKワールドテレビ¹⁾で、同時通訳者を動員して災害と原発事故関連の情報を日本語と英語で流し続けた。地上波では朝のニュースにも同時通訳者が配置され、NHKワールドでは、24時間3シフトで同時通訳者を待機させ、ニュースとともに官房長官会見などを同時通訳で伝えた(NHK国際放送局 2015)。今やますます日本に対する世界の関心が高まり、来日する外国人も急増する中で、今後も英語によるニュース報道とともに日英放送同時通訳者の役割が重視されるであろう。

日英放送同時通訳の現状

現在、日本語ニュース報道に英語訳をつけて放送している放送局はNHKのみである。通常は平日の18時からの冒頭10分間と、19時からの30分、および21時からの1時間のニュースが、日本語放送を多重化して英語でも放送されている。日本語と英語のニュースの書き方が大幅に異なることから、ニュースの大半は、英語ニュースライターと呼ばれる翻訳者によって、日本語ニュースの原稿を基に事前に英語ニュースに書き直され、その原稿が英語母語話者のreaderと呼ばれる人たちによって読み上げられている。しかし、ニュースは刻々と変化し、番組中も何度も新しい情報に差し替えられることが多く、しばしば英訳が間に合わない部分が出てくる。また、放送中に入ってきた新しいニュースや生出演のゲストととのやり取りなどは事前の翻訳はできない。こうした部分は、同時通訳者がその場で英語に通訳している。通常は、番組全体の8~9割程度のニュースは事前に翻訳されるが、以下のような部分は、平時の放送でも同時通訳者が通訳を行っている。

- ①天気予報の一部
- ②野球速報
- ③相撲中入り後の取り組み
- ④台風の現地レポートなど、地方や海外からの記者レポート
- ⑤ニュースの後にスタジオのアンカーが一言二言感想などを述べる「後受け」という部分
- ⑥スタジオでのアンカーと記者のやり取り
- ⑦スポーツから政治、経済ニュースまであらゆる種類のニュースの解説
- ⑧「今、入ったニュース」
- ⑨住民の一言など、時間的制約その他の理由で、翻訳がもれた部分

同時通訳者は、「万に備えてスタンバイする」のが本来の役目で、第一義的には翻訳が間に合わない直近のニュースやニュースの一部に対応する。また、大きな地震や事故など重大かつ緊

急の事態が発生すると、予定していたニュース番組が大部分もしくは全面的に同時通訳体制に変わることもある。911 アメリカ同時多発テロや 311 東日本大震災がその例である。重大事象でも、2018年6月12日の米朝首脳会談のように、事前に予測できる重大発表などもある。その場合は、多重ニュース配置の同時通訳者が前もって増員されることも多い。

昨今は日本に在住・滞在する外国人が急増している。また、国外に対しても英語で情報発信すべき重大災害なども頻発している。英語による国際発信の重要性が増し、したがって、日英放送通訳の重要度も更に増すことは間違いないだろう。2018年9月初め関西を襲った台風のニュースも、その直後の北海道の地震のニュースも、アメリカ公共放送 PBS 局など海外メディアが即日取り上げていた。海外でも日本での出来事への関心が高まっていることを示している。

現在 NHK でしか日英放送通訳を使っていないため、日英放送通訳者への需要が今後急増する可能性は大きくはないが、地上波、ワールド TV とともに日英同時通訳者の確保が重要だと見ている。NHK グローバルメディアサービスでは、近年、数人だが、日英同時通訳要員を増員した。また、東京周辺で災害等が発生し東京のスタジオが使用不可能となった場合に備えて、関西地方でも放送日英同時通訳者の訓練が定期的に行われている。放送には質の高い日英通訳者の確保が不可欠であるが、その日英放送同時通訳者の養成には時間を要する。この点への留意も重要である。

.....
【註】

1) 2009年2月に本格的に海外向けに英語のニュース放送を開始した放送局である(奥田 2010)。ニュースの他、様々な情報番組などを放送。国内でもインターネットで視聴が可能である。

【引用文献】

- NHK 国際放送局(2015)『NHKは何を伝えてきたか 国際放送の80年—国際放送年代史+サービス概要 1935~2015』NHK 国際放送局
- 奥田良胤(2010)「外国人むけ『NHKワールドTV』新スタートから1年、発足の経緯と課題」『放送研究と調査』May, pp2-17. 【Online】
https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2010_05/100501.pdf (2018年8月11日)
- 川野辺直雄(2008)「バイリンガルセンター事始めの記」『断章』NHK 記者風雨会、50周年、11月1日号、pp115-119.
- 柴原智幸(2003)「放送通訳をつけたニュース番組に対する需要の変化と今後の展望」『Interpretation Studies』No.3, pp70-82.
- 沼口安隆(2011)「小特集 テレビデジタル時代 いま アナログ時代を振り返る (3)テレビ音声多重放送の研究開発の歴史」『映像情報メディア学会誌』vol.65, No.7, pp.903-906. 【Online】
https://www.jstage.jst.go.jp/article/itej/65/7/65_903/_pdf (2018年8月12日)